

---

**不幸少女と幸運少年 ~ 漆黒の闇夜に生きる者 ~**

三原煉

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

不幸少女と幸運少年 ～漆黒の闇夜に生きる者～

### 【コード】

N0241C

### 【作者名】

三原煉

### 【あらすじ】

あの事故から数年 彼らは新しい運命を受け入れ、生き続ける。

おい、起きろ。

誰かに叩き起こされた。だが、周囲には誰もいない。漆黒の闇の中、いるのは自分ただ一人。

ああ、アイツか……。

頭で叩き起こした人物を理解し、寝ていたベッドから身を起こした。

コンコン

「姉さん、入ってもいい？」

ドアのノックと共に少し高めの声が聞こえた。

彼女には聞き覚えのあった声である。

「ああ」

彼女はそう言いながら、上着を脱ぎ始めた。

ドアが開き、入ってきた10歳ぐらいの少年は彼女の姿を見て、ため息をついた。

「姉さん、いい加減に人前でそんな格好をするのをやめたら？」

「別に、見るのはお前ぐらいしかいないからな」

パサッと服をベッドの上に脱ぎ捨てた。

漆黒の闇だった部屋の中が小さな飾り窓から月の光が彼女の背中に照らした。

左肩から右腰までに至る大きな傷。

何年も前、トラックの下敷きになり、その時についた傷である。傷はもう癒える事もなく、消える事もなく、彼女の色白の背中に

無残に刻まれている。

普通、この様な大傷を受けたのなら、死んでいるはずだ。

しかし、彼女は生きている。

「今日も仕事か。由宇、私の代わりに行ってくれないか？」

「無理に決まっているじゃん。僕の担当は昼間。

こんな夜中じゃ、力も出ないし。第一、力の温存の為にこの姿なんだから」

由宇と呼ばれた少年は彼女に言い返した。

言っている言葉の意味を理解しているのは由宇と彼女だけであろう。  
「それぐらい分かっている。ただの独り言さ」

彼女はそう言いながら、ドアの近くにかけてある黒いコートを手に取り、羽織った。

「それじゃ、行ってくる」

「いつてらっしゃい、由貴姉さん」

都内某所 高層ビルが建ち並び、死角が多い。

「けっ、しけてんなあ」

茶髪でいかにも悪と言う男性が財布の中身を見て、そう言った。

茶髪の男性は財布からお札だけを取り出し、先程まで殴り気絶した男性に空となった財布を投げた。殴られ、顔が誰だか分からないほどになった男性は壁にもたれかかり、「ヒューヒュー」と呼吸をしていた。

「じゃーな」

茶髪の男性はそう言って、その場から去っていった。

しばらく歩いていくと、茶髪の男性は誰かとすれ違った。  
すれ違う時、お互いの肩が当たった。

「おい、何しやがるんだ」

男性は肩が当たった人物のコートの襟を掴んだ。男性に掴まれた人物は下を向いていた顔を上げた。由貴である。男性は由貴の顔色白で整いすぎている顔立ち、心の奥底を見明かされているような黒い瞳　を見て、少し後ずさったが、すぐに思考を変え、口元を緩ませた。

「おい、姉さん。よくも俺の肩にぶつかってくれたなあ。

それなりの礼をしてくれるんだろうな」

「礼だと……？」

クツクツクツつと笑いを抑えているような笑いが由貴の口元から吐き出される。

「私はお前のような罪人に礼をする理由がない。だから、礼をする必要がない。

それに私はお前を裁きにきたのだからな」

由貴はコートを掴んでいる男性の右手を振り払い、男性と少し距離を置いた。

「は？　何言っつていやがるんだ」

男性は由貴の言葉を理解できていなかった。まあ、理解することなどできないであろう。彼には難しすぎる意味が含まれているから。すると、由貴の頭上から一枚の紙切れが落ちてきた。その紙切れはなぜか光り輝いており、まるでこの世のものではないものである。「閻魔王はお前をじかに責めたい様だ。

地獄の娘、黄泉が裁く。

かさぎりてつや  
笠霧哲哉、大焦熱地獄の刑に処する」

そう由貴が言い終わると同時に由貴の背後に地面からまるで扉のような物体が出てきた。扉のような物体は音も立てず、中心から開いた。開くと同時に中から爪の伸びたどう見ても人間の手ではない手が出てきて、男性の体を掴んだ。

「な、何だよ、これ。おい！　聞いているのかよ！」

「自業自得であろう。私はただ閻魔王の代わりに裁くだけ。

まあ、お前にぴったりの詩をやるう」

由貴が喋っている間に男性はほとんど扉の方へと連れて行かれる。男性は必死に抵抗をするが、全然効果はないようである。

「地獄より 聞こえし声に

かくのごと すでにおそるる

地獄にて 焼かるるときは

乾きたる 薪草を焼くごと

焼ける火は まことの火かは

悪業の 火の焼けるなり

火の焼くは 消ゆべきものを

業の火は 消すことかたし」

由貴が口を閉じたと同時に男性は扉の中に入り、扉は閉ざされた。扉は地面の下に戻るように消えていった。扉が消えると同時に由貴の背後に黒髪の男性が現れ、由貴の首元に腕を回し、もたれかかった。

「もたれかかるな、<sup>カウラ</sup>聖」

「別にいいじゃないか。減るもんじゃないし」

「だからといって、こんな人前にひつつくな。てか、出てくるな」

由貴は聖の腕を振り払い、スタスタと歩き始めた。

「……最近、つつこみが厳しくないか？」

聖は由貴に付き添うように歩く。

「で、今日は何の用だ？」

由貴は歩きながら、コートのポケットの中に入っている煙草の箱を取り出し、1本、口に銜えた。

すると、聖が由貴の口から煙草を取った。

「身体に悪いよ」

「それぐらい分かっている」

由貴は言いながら、聖が手にしている煙草を奪い取った。

「……後々、つらい思いするのは黄泉なんだよ」

「煩い。そろそろ地獄むじうに戻った方がいいんじゃないか、聖観音様しょうかんのんさま」

由貴は聖を真正面から見た。突き刺さるような視線　まるで誰

も近づけさせないような感じである。聖はため息をついた。

「分かったよ。僕は帰るよ。宵によろしくね」

聖はそう言うと、由貴に背を向けて、歩き出した。

ふと、何かを思い出したように聖は足を止め、由貴の方を向いた。

「煙草はやめなよ。後、千年は生きるんだから」

そう言い残すと、聖は暗闇の中に消えていった。

運命を変えられた。別に後悔はしていない。

後悔していいはずなのに、どうしても自分を苦しめる。

心残りなのは弟の由宇だ。

私が願ったばかりにこんな運命を背負わせてしまった。

……過去を振り返っても仕方がない。

もう時は進み、運命は動く。

私はもう前を向いて歩くしか道はない。

地獄の娘、黄泉として

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0241c/>

---

不幸少女と幸運少年 ~ 漆黒の闇夜に生きる者 ~

2008年11月7日06時34分発行